



統計から社会の実情を読み取る

第112回 野菜品目に関するデータを調べる

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。㈱国民経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト(<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>)を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Onlineにて連載を執筆中。



日本人はどんな野菜を食べているか

野菜は、ビタミン、ミネラル、食物繊維の重要な供給源であり、健康な食生活を送る上で大切な存在と位置づけられている。厚生労働省が推進する健康づくり運動「健康日本21」では健康増進の観点から1日350g以上の野菜を食べることを目指している。しかし、野菜を食べる量は増えておらず、2018年の野菜摂取量(20歳以上)は281.4gとこの目標にはなお遠い水準である。

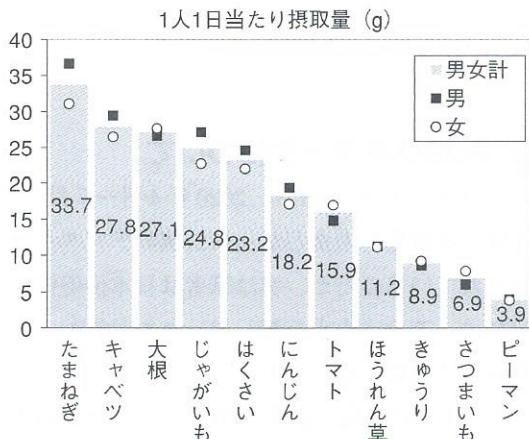
今回は、野菜の品目に着目して、注目される統計データを紹介しよう。

まず、日本人はどんな野菜を食べているかを調べてみよう。

野菜をどれだけ食べているかのデータについては、生産量、輸出入量等から供給量を計算する農林水産省の「食料需給表」、世帯対象の食事調査から求める厚生労働省の「国民健康・栄養調査」、家計における購入状況を集計する総務省統計局の「家計調査」から得られるが、品目別のデータは、後二者に限られる。

「健康日本21」の野菜摂取目標のデータとして

図1 日本人の野菜摂取量ランキング(2018年)



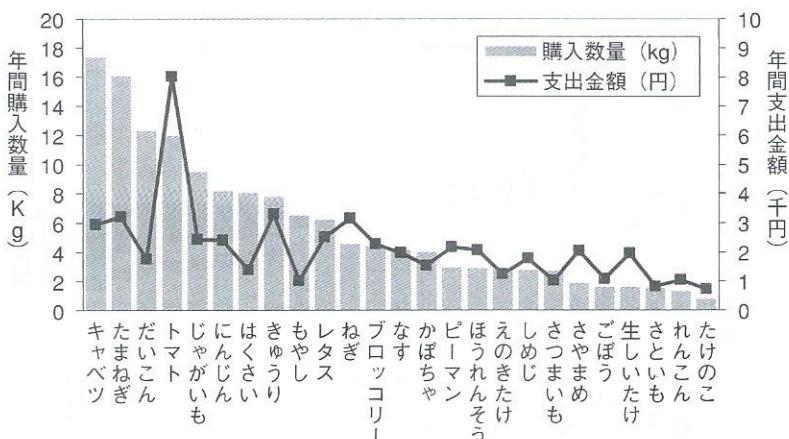
注) 1歳以上が対象。じゃがいも、さつまいもは加工品を含む。

資料) 厚生労働省「国民健康・栄養調査」

使われているのは「国民健康・栄養調査」である。まず、図1にこの調査から野菜摂取量の品目ランキングを掲げた。この調査では、次に見る「家計調査」と異なり、男女別の摂取量も分かるので、これについても掲げた。

野菜11品目のうち摂取量が多いのは、多い順に、たまねぎ、キャベツ、大根、じゃがいも、は

図2 日本人の生鮮野菜購入数量・支出金額ランキング (2017～19年平均)



注) 二人以上の世帯が対象。

資料) 総務省統計局「家計調査」

くさいである（以下、野菜名の表記は取り上げた統計による）。

男女別の違いが目立っているのは、たまねぎ、キャベツ、じゃがいもで男性の方が多く、トマト、さつまいもで女性の方が多い点である。

「国民健康・栄養調査」の掲載品目はあまり多くなく、その他で一括されている場合が多いので、品目数が多い「家計調査」での購入数量（二人以上の世帯）の25品目のランキングを図2に掲げた。「家計調査」では支出金額も分かるので、そのデータも併載した。

購入数量の多い野菜は、キャベツ、たまねぎ、だいこん、トマト、じゃがいもの順である。支出金額は、トマト、きゅうり、たまねぎ、ねぎ、キャベツの順である。トマト、きゅうり、ねぎなどは購入数量の割に支出金額が多い品目となっている。

図1の摂取量と図2の購入数量では、順番は違うが上位3品目は同じである点が興味深い。まさに、キャベツ、たまねぎ、大根という野菜3品目が日本人にとって「野菜の王様」だといえよう。そして金額的にはさらに、トマト、きゅうりが加わり、「野菜の5大品目」となる。

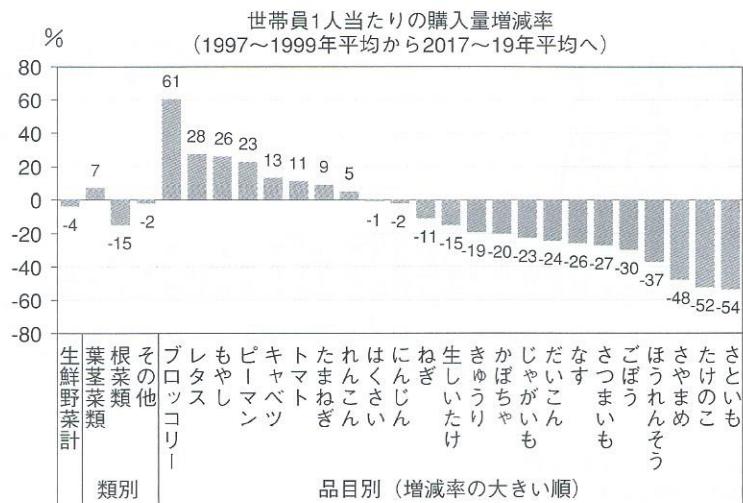
食卓にはどんな野菜が増えているか

次に、どんな野菜が食卓をより多く占めるようになってきているかを「家計調査」の購入数量の20年間の増減率によって見てみよう（図3）。世帯当たりの購入数量は平均世帯員数の減少にも影響されているので、その分をキャンセルするため、ここでは世帯員1人当たりの購入数量で増減率を計算している。

生鮮野菜全体の増減はこの20年間で4%減と若干の減少となっている。漬物などの加工野菜、あるいは弁当、総菜、あるいは外食による野菜摂取は含まれていない点を踏まえてデータを解釈する必要がある。ここでは掲げていないが、同期間に、上記の「食料需給表」の野菜供給量はかなりの減、「国民健康・栄養調査」の野菜摂取量はほぼ横ばいというデータもあるので、「家計調査」によるこのわずかの減少は、これらとほぼ並行する結果と解釈できよう。

類別では「葉茎菜類」ではむしろ増加、「根菜類」では大きな減少となっている。品目別の増減は野菜によって大きな差がある点が特徴である。最も増加したブロッコリーは61%増、最も減少した

図3 生鮮野菜購入数量の増減率（20年間）



注) 二人以上の世帯。1997～1999年は農林漁家を含まない値。えのきたけ、しめじは、1997～1999年のデータが得られないため省略。

資料) 総務省統計局「家計調査」

さといもは54%減と実に対照的である。品目数としては減少した野菜の方が16品目と増加した8品目の2倍とかなり多くなっている。

品目別の特徴は、もやしを除くと、ブロッコリー、レタス、ピーマン、キャベツ、トマトなどカタカナで表記される「洋野菜」が伸び、かぼちゃ、ごぼう、たけのこ、さといもといった根菜類中心に「和野菜」が減少している点にある。煮物からサラダへといった食の洋風化が野菜品目の盛衰にもあらわれているといえよう。

品目別の地域分布の特徴

「家計調査」では地域別のデータが得られる。ひとつひとつの野菜品目の地域分布を分析する余裕はないので、ここでは、各品目のばらつきを購入量1位都市の対全国倍率で示した(図4参照)。

この値が高い野菜品目は、特定の地域で特に食べる量が多い野菜、そして、この値が低い品目は、どの地域でも食べられている全国的に平準化の進んだ野菜と見なすことができる。さやまめを最も多く購入する新潟市では全国2.48倍の消費量と

なっている。これとは対照的に、キャベツを最も多く消費する秋田市でも対全国倍率は1.21倍に過ぎない。

平準化が進んでいる品目は、キャベツ、たまねぎ、じゃがいも、ピーマン、にんじん、だいこんなどであり、これまでふれてきた主要野菜にはほぼ一致する。地域特化度が高い品目はさといも、たけのこなど衰退気味の野菜が多い。

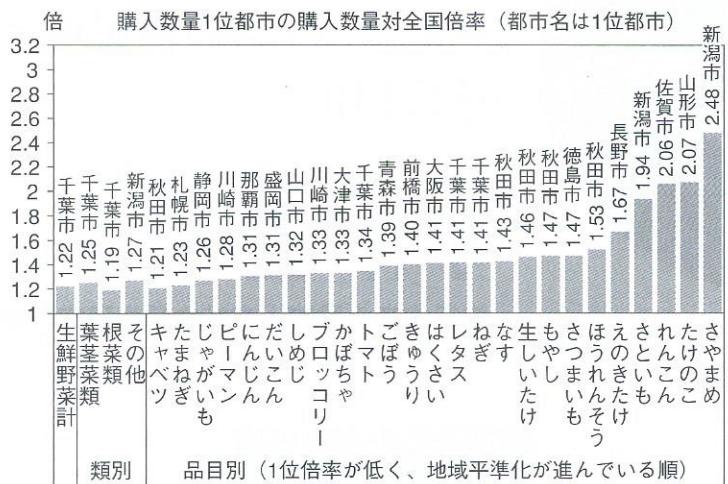
1位都市の顔ぶれを見ると、生鮮野菜計、葉茎菜類、根菜類やトマト、レタス、ねぎが1位の千葉市がいわば「王道を行く野菜都市」として目立っている。他方、「その他」やさといも、さやまめといった特定野菜の倍率が高い新潟市や1位都市の品目が5品目と最も多い秋田市は、「特定品目へのこだわりが特色の野菜都市」だといえよう。

困窮家庭で多く食べられている野菜は何か

最後に、経済的な困窮度で食べる野菜がどう異なるかというあまり目にすることがないデータを紹介しよう(図5参照)。

経済的に苦しい世帯ほど野菜摂取量が全体的に

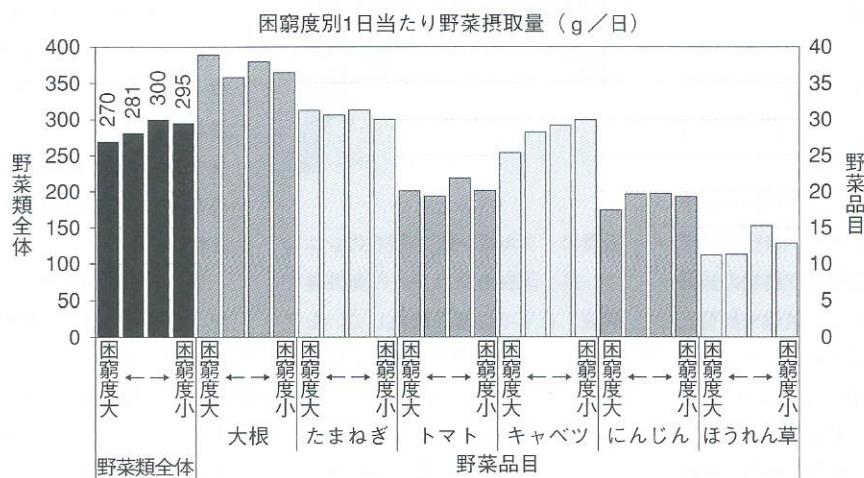
図4 生鮮野菜購入数量の地域別のはらつき（2017～19年平均）



注) 二人以上の世帯。対象都市は全国の県庁所在市と政令市。

資料) 総務省統計局「家計調査」

図5 困窮家庭で食べられている野菜



注) 集計の対象は「栄養摂取状況調査票」と「生活習慣調査票」の両方に回答した者である。ここで、「困窮度大」から「困窮度小」への4区分は、「生活習慣調査票」の「経済的な理由で食物の購入を控えた又は購入できなかった経験は」という設問への回答が、それぞれ、「よくあった」、「ときどきあった」、「まれにあった」、「まったくなかった」の者である。

資料) 厚生労働省「国民健康・栄養調査」(2014年)

少ないということは、数次にわたる国民健康・栄養調査報告書における所得水準別の集計でも明らかになっているが、図に掲げた2014年にだけ集計された困窮度別の野菜摂取量のグラフでも野菜類全体では同じ結果となっている。

品目別に見ると、「食べで」のある重量野菜の

だいこんやたまねぎ、あるいは植段は高くても調理の簡単なトマトは困窮家庭でも比較的多く食べられており、一方、こうした特徴に欠けるキャベツ、にんじん、ほうれん草では、困窮者ほど摂取量が少ないという野菜の一般傾向が当てはまっている。